
G20

野球人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G20

【Nコード】

N5465Z

【作者名】

野球人

【あらすじ】

ごく普通の高校生活を送っていたはずの俺、中野修司なかのしゅうじはある事件をきっかけにどこか分からない異世界に送り込まれた。

元の世界にもどり、あの事件の真相を探るべく冒険を始める。

登場人物紹介（前半）

中野修司・・・本作の主人公。ある事件をきっかけに異世界、『ロカード』に飛ばされてしまう。男

エルニ・レイナ・・・G10に所属。陛下とは・・・？女

ナルノ・シュターゼン（陛下）・・・『ロカード』の首都『カドイフ』を治める王族。年齢13。女

カンデ・ローナ・・・G2に所属。G2でも最下位の實力。女

レット・セイカ・・・G20に所属。G20で第2位。女

インダ・ドル・・・G14に所属。女性に対してキザである。男

まだまだ出るとはいますが、メインは大体こんなかんじです。

・・・もう朝・・・か？

「ん〜・・・」

頭がまだボーとしている。寝起き特有の何も頭がない状態が続く・

「つてあれ？」

こゝここは？俺はなぜこんなことに？

「え？え・・・？」

あたりを見回してみると、とても豪華な部屋にいたことがわかった。

「あれ？確か俺は・・・」

今、俺は危機的状況に陥っている・・・とでも言うのだろうか。

「ちよつ！待てつて！」

目の前にはナイフを手に持ち今にも刺してきそうな覆面男がいる。

「か、返せ！」

覆面男はさつきからこればっかりだ。なんだ返せつて・・・

「だ、だからなにをだ！とりあえず落ち着け！」

「お前のせいで俺の息子は死んだんだ！」

はい！？全く意味がわからない！と、とりあえず現状を確認だ！

・学校から帰ってきたらなぜか家に覆面男がいた。

・俺を見るなりこうなった。

全然わからない！もちろん俺は覆面男の息子なんて知らないし、身
近にいた人が死んだなんて聞いてない。

「う、うわっ！」

ズキッとわき腹に痛みが走る。さ、刺された・・・のか？意識が・

。

つてはずだった。なぜこんなところにいるんだ？

「起きましたか？」

「う、うわ！」

だ、だれ！？

「あ……。すみません……。」

いきなり声をかけられたと思ったら今度は謝られたぞ？なんだ？

「私の名前はエルニ・レイナ。エルナとお呼びください。」

「あ……。エルナさん？ってどこの人？」

「どこって……。？この国ですが？」

「ここってどこだよと言おうとしたら……」

「あなたのお名前は？」

あ、ああそついやまだだったな。

「俺の名前は中野修司なかのしゅうじ。ってかここはどこ？」

「ここは王族付属の寮G1です」

「……。G1？」

聞き慣れない言葉に聞き返す。

「はい。詳しい話は王宮に行ってからあると思うので……」

なるほど。王宮とやらに行ったら事情がわかるのか。

「わかった。じゃあさっそく行くよ」

「はい。では一緒に私が同行させていただきます。」

王宮への行き道。

「ところで俺はなんでこんなところに居るんだ？」

ほとんど記憶が無いので半ば独り言のように言つと……

「さあ……。？ここから東のほうにある森の奥で倒れておりました

よ」

なんでそんなところに……。とか考えている内に王宮っていうところに着いた。

「う、うわ……。」「

中はとんでもなく豪華だった。俺が寝ていた部屋。確か……。G1だっけ？もけっこう豪華だったけれどあれとは比べ物にならない。

「こちらですよ」

「お、おう」

そして一際大きく、キレイな扉の前に来た。

「さあ、これから陛下にお会いしますよ」

G 1 (後書き)

新しい小説を投稿させていただきました。

今回は戦闘物を書くことと思いいこのG20を書きました。少しでも興味を持っていただいた方、展開のペースは遅いと思いますが学生なのでそこは見逃してください。

下手だと思いますがご指摘、感想をよろしく願います。

入寮

ガチャリ・・・と思い扉が開いた。開けたのではなく開いたのだ。
「・・・」

少し戸惑いつつも奥に進む。まあ隣にはエルナさんも居る事だし。
「よくきたな」

少し幼さを残し、それでいて凜とした声が聞こえてきた。あれが陛下・・・？ってどう見ても12、3歳の少女なんだが

「陛下。この方が例の・・・」
「うむ」

例のって・・・あ、俺のことか。

「名前は・・・？」

「あ、えつと・・・中野修司です・・・」

「ナカノ？聞かない名前だな？」

まあ日本名ですからね。

「じゃあ、さっそくだがエルナ」

「は、はい」

「彼をG20に入寮させてくれ」

何？G20って？さっきのはG1だったよな・・・？

「えっ！？い、いきなりですか！？」

エルナは驚いているがこっちはさっぱりだ。

「わかったか・・・？」

「はい・・・」

〈帰り道〉

「はぁ・・・」

エルナさんは帰り道ずっとため息ばかりついている。

「ど、どうした・・・?」

さすがに心配になったので聞いてみた。

「だってあなた!G20ですよ!？」

「え・・・だからG20って何？」

「ほ、本気で言ってるんですか!？」

本気だよ。俺はいつでも本気だよ。

「うん。一応・・・」

「あなた、どこ出身なんです？」

「日本だよ。三重県出身」

「ニホン?ミエ?聞いたことありませんね・・・」

えく・・・。マジかこの人。っていうかさ・・・

「あの、ここはどこなの?陛下さんは何にも教えてくれなかったけど」

「あ、えつとここは『ロカード』、その中の首都『カドイフ』です。」

「それこそ聞いたことないぞ・・・?ってことはここは・・・い、異世界ってこと?」

「え・・・。それって」

異世界ってこと?と言いかけたとき

「あつ!あそこに見えるのがG20ですよ」

で、でかい・・・。声が出ないほどの衝撃だった。

入寮（後書き）

さっそく2話目を投稿させていただきました。
できるときに投稿していくのでそのところはよろしく願います。

では、ご指摘、ご感想お待ちしております。

レット・セイカ

目の当たりにした『G20』。さっき行った王宮ほどの大きさがあ
る。

「さあ、入りましょうか」

エルナの声には少しばかり緊張が混じっていた。

本日2回目の重いドアを開ける。(てか、勝手に開いた。)

「なあ、なんでこのドアって勝手に開くんだ？」

ずっと思っていたことを聞いてみた。ちなみに帰り道、エルナに敬
語で無くても良い。と言われたので、それからはタメ口だ。

「なんでって……。それは、『ワンス』ですよ……？」

「わ、ワンス？」

聞き慣れないその単語を言い返す。

「はい。手を使わずにドアを開けたり、物を動かしたりすること
ですよ？」

うん？ようするに魔法……。？いやいや、魔法なんてこの世にある
わけ……。でもここは異世界らしいし……。なら有りなのか？
いやしかし……。

「あつ！セイカさん……」

イロイロ考えていると目の前に一人の少女がいた。碧眼で金髪だ。
みるからに日本人ではない。

「あら。エルナさん。そちらの方は？」

セイカと呼ばれた少女は俺の方を見て言う。

「あ、こちらはナカノ、シュウジさん。」

「ああ、例の……」

なんだよ例のって。

「シュウジさん。こちらはレット・セイカさん。」

「#ハッシュタグ」

レット・セイカ（後書き）

今回は微妙なところで終わってしまい申し訳ありません。

新キャラの説明もできなく自己都合により今話は終わってしまいました。
した。

次の話できちんと説明して行くのでよろしくお願いします。

G20（説明）

「はじめまして」

軽くあいさつを交わす。すると

「ではさつそくこのG20を説明しますわ」

会ったばかりだというのにセイカはこのわけのわからなく、どでかい建物について教えてくれるそうだ。

「では、まずここではG2からG20までの格付けがされています。

」

お、さつそくの説明だ。よく聞いておこう。

「一番下がG2、上がG20となります。」

「へへ、あれ？でもなんでG1が無いんだ？」

気になったので聞いてみると

「G1はこの学校の教師なんです」

「えっ？ここ学校なの？」

初めて知ったぞ？そんなこと。

「それはですね・・・」

（説明中）

とりあえずこういうことらしい。

ここはカドイフにある学校で『セント高校』。実際は違うのだが俺が勝手に、日本名をつけた。そしてG20はその学校でもトップクラスのやつらがいる。トップクラスというのは勉強でも、スポーツでもなくさつき教えてもらった『ワンス』が強力な人。つまりあの魔法が強いほど学校でも優等生ということらしい。

で、この俺こと中野修司は陛下のご命令でこのG20に編入されたってことらしい。

学校自体はこの寮から約100Mほどの距離でとても近い。しかしこのG20を見て、でかいと思ったがこれはG20だけではなくG2からの全員が入っている。つまりG2からG20までのおよそ300人ほどがこの寮にいるらしい。

(でも部屋割りはちゃんとクラスごとに分かれてるんだからややこしい……)

G2などは、たんなる格付けなのでG2からG20までいるんだとか。

「まあ、G20とかはたんなる成績だと思っていてください」

「はあ……」

うん……。ざつと説明してもらったけどわかりにくい……。まあその内慣れるだろ。

「そして私はG20の中でも第2位の实力ですわ!」

「へ、へえ、すごいな」

やや声を大きくしてしゃべるセイカに少し驚く。

「で、では修司さん。部屋にご案内します」

「お、おう」

エルナも少しびっくりしていたようだ。

「じゃあ、いろいろ教えてくれてありがとうな」

「お安い御用ですわ」

セイカに例を言って自室へと案内してもらった。

G20（説明）（後書き）

今回は説明が多くてすいません。でもやっぱり説明していかないとわからなくなるだろうし。自分も（当たり前ですが・・・）
少しづつ、ゆっくりだと思いますが進めていくのでよろしくお願
いします。

自室にて

「ここが修司さんのお部屋になります」

「ほお・・・」

思わずこんな声が出てしまう。俺はなぜだか知らんけどG20に格付けされたから部屋も豪華なんだろうか？

「と、言ってもベットとかしか無いんだな」

「と、言いますと？」

「ああ、別に不満では無いんだが、テレビとかパソコンとかは無いのかなって・・・」

こんな異世界に来てまでもそんな心配しかできない俺は自分自身に少々あきれるが・・・

「てれび？ぱそこん？ああ、東洋の物ですか？」

「まあ、そうらしいな・・・」

自室にくる途中、エルナに日本の話をしたんだが、うまく伝わらなくけつきよくこんなかんじになった。

「あの、また明日、王宮に行かなければならないので今日はゆっくりしていて下さい」

「へ？また行くのか？」

正直ああいうところ、苦手なんだよなあ・・・

「ええ。まあ、状況があれですし・・・」

「状況？」

「い、いや。こちらの話です。では夕食の時間にはまた呼びに来ますね」

と言ってエルナは出て行った。まあ夕食までのんびりしてるか。

「……さん。修司さん！」

「ん……？」

「起きてください！夕食ですよ？」

ああ、寝てしまったらしい。でもどこな知らないところでも寝れる俺って、適応力すごいね。

「食堂に案内しますので」

「わかった。行くか」

これまた食堂は広いのなんの。って300人程にいるって行ってたからあたりまえか。

「では、修司さんは裏方へ回ってG1の人たちへ挨拶に行ってください」

「え！確かG1って先生がいるところだよな……？」

「はい、そうですね……？」

ん？このエルナの疑問顔。どっかで見たことあるような……？あれが既視感ってやつか。

「こっちの職員室みたいなもんだよな……。なんとなくイヤだな」日本にいた時のことを思い出し、しぶい顔になる。

「そんなこと言わずに！別に悪いことして行く訳ではないですし」そりゃそうだ。ここにきてまだ半日はかりしか経ってないのに、呼び出しなんてどんだけ大物なんだよ。

「ここからG1までは一本道なのでその第一ゲートから行けば着きますよ」

「わかった。ありがとな」

エルナに礼を言っつてG1へと向かう。ちなみに俺が最初寝てたところは、G1でも保健室みたいところらしい。

「っていうか……。やつぱり行くのイヤだよな。職員室……」

日本での行いが頭を過ぎる。世話になったよな。よく……。

自室にて（後書き）

更新が不定期ですいません。少しずつG20の世界がわかって来た
でしょうか？

バトルシーンは都合によりまだ出せずにすいません・・・
あ、頭の中ではちゃんとできているんですよ！？ww

たぶん説明がわかりにくいと思いますので
わからないところは感想に書いていただくか
メッセージを送ってもらったら説明をしますので。
これからもよろしく願います！

クラスメイトは!?

再びG1へと来た。とりあえずノックを試してみる。すると
「名は?」

これだけの声が返ってきた。

「あ、中野修司です」

「ナカノ? ああ、入れ」

こちらは手動で開く。

「君が例の子か」

「はあ、たぶん・・・」

話しかけられたその女の人は黒いスーツをビシッと着ていた。

「私はメイサ・リントイド。君の担任だ」

担任の先生か。悪い印象を持たれないように・・・

「ちなみに私は見た目では無く、実績で判断するぞ?」

な! 読まれた!?

「ふつ、このくらいは常識だ」

うーん。人の心を読むが常識とは、常識はずれだな。

「わけのわからないことを考えるな。とりあえず食堂へ一緒にこい」

ええ! また行くのか! まあ深く考えないでおこう。また読まれるし。

「えー。今年から担任になるメイサ・リントイドだ」

今は何か学年が変わった時期らしく一組(俺はこの一組らしい)全員がメイサ先生を見ている。そして・・・

「すでに話題となっているが転校生を紹介する」

ハイ。俺の出番。

「えっと。中野修司です。よろしくお願いします・・・。」

少々戸惑いながら言う。だってさ・・・。

(女子率、高くないか!?)

ほとんどどってか一組全員女子!?

クラスメイトは！？（後書き）

今だに物語の中で一日が経っていないことに気づきました……。急遽、先生を出すことになったので。

一組は大変なことになりました。

もうすぐようやく説明が終わりそうですw

ではご指摘、ご感想お願いします！

(な、なんてことだ・・・。)

俺はついつい心の中でつぶやいてしまう。普通の男子高校生なら喜ぶべきなのかもしれないが、何しろ魔法が日常的に使われている世界に来て、そのうえ男子1人。これは思っていたより精神的に苦痛だ。

「おい。あいさつをせんか」

「あ、はい！」

メイサ先生に怒られたので一応自己紹介にうつろう。

「え、中野修司です。よろしくお願いします。」

一組全員(約30人ぐらい?)があたりまえだがこちらを見ているから少々緊張をしてしまう。

「よし。中野は理由があり、この世界のことを全く知らん。明日は学校の説明から入る。クラスごとにある始業式は明後日に持ち越す。解散！」

え？終わり？ご飯は？

「中野。お前の部屋は400号室だ」

ポイントと鍵を投げられる。それをキャッチし、ここに居ても何にもならないので言われた400号室に移動する。

（自室）

（つてここ、エルナに教えてもらった部屋だな……。）
ベットに寝転びながら今日起こったことをおさらいしてみる。

まず俺は日本からここ、ロカードへと飛ばされてしまった。そこでエルナ・陛下・セイカ・メイサ先生に出会った。

いつかは帰ろうと思っているが今は全くわからないのでここに居ようとは思わう。

さらにこの学校ではG2からG20までの格付けがされており、俺はなぜか1番上のG20に格付けされた。

（はぁ……。明日起きたら夢でしたってオチを期待しよう……。）

（翌朝）

期待はむなしくやはり部屋は400号室、ドアにはG20と書かれた札、その横にナカノ・シュウジと書かれていた。

「おはようございます。こんなところでどうしたんですの？」

珍しい人に声をかけられた。確か……

「セイカ……？」

「はい？」

「いや……。特になんでも無いけどさ……」

そこには昨日会ったG20、レット・セイカが居た。

「そんなことより早くしませんと朝のHR本ルームに間に合いませんよ？」

「え！マジか!？」

俺はこの世界にもHRとかあるんだなあと思いつつセイカについていく。

400号室（後書き）

ようやく1日経ちましたねw

途中でまとめながらじゃないと作者もわからなくなって来てしまうので・・・

まだ予告している戦闘はありませんが次回かその次ぐらいに出しますので。

すいません・・・

ではご指摘、ご感想お願いします。

カンデ・ローナ

「さて！ここが我が1年1組ですわ！」

いや……。そこまで説明されなくても書いてあるし。ちなみになぜかこの世界の言葉、文字は理解できる。その1組に入ると……
「おい、中野。早く席に着け。あとレットもG20だからと言って遅刻は許さんぞ」

「わ、わかってますわ！」

む？あのセイカが押されている？まあG1……もとい教師にはやはり太刀打ちできないのだろう。と思いつつ席に着く。

「昨夜のクラス集会でも言ったが私がこれから君たちの担任のメイサ・リントイドだ。さらに転校生は……もういいか」

うん。スルーだ。まっいいか昨日やったし。しっかし女子だけだなあ……。とキョロキョロしていると

(……ん？)

ジッとこちらを見ている人が居る。確かどこかで見た……。いやあるわけないか。相手もこちらの視線に気付いたのか目を反らしている。

「では今日からさっそく授業だ。全員外へ」

え？HR終わったの？外で授業ってことは体育か？体育ってどんなことするんだ？

「ではこれよりワンスの実習訓練を行う」

……。わかってたけどさ。次々と生徒たちがワンスを使っていく。

(……しかし)

気がかりだ。HRからずっとこちらを見ている。しかもけっこう遠くから。

「なあセイカ」

「なんですの？」

近くに居たセイカを呼ぶ。

「あのさ、さっきからこつちを見ている……」

「ああカンデ・ローナさんですね」

「カンデ？」

「ええ、G2の中でも1番下ですわ」

フツと軽く笑うセイカ。うん……

「セイカ」

「はい？」

セイカは疑問顔を見せ、こちらに顔を寄せる。こいつはこいつで美人だからあまり寄られると困るな……

「お前が強いことはわかるよ。でも……だからと言って下のやつを嘲笑うのは良くないぞ？」

そう俺が注意すると

「うっ……。まあ修司さんがそうおっしゃるなら……」

しぶしぶOK。案外普通に説得できたな。そして俺はそのカンデ・

ローナに近づく。

「なあ？」

「わっ！」

いきなり後ろから声をかけたからだろうか？びっくりされた。まあそりゃそうか。

「な、な、なんだ？」

うわー、すげえ動揺。まあそれは置いて。

「俺は中野修司。よろしくな」

スッと手を出す。もちろん握手のためだ。

「……ん」

はずかしいのかローナは赤面しながら握手に応じてくれた。うん、いいやつだ。

「あれ？」

「こ、今度はなんだ？」

ふと気付いたことがあった。

「お前、刀でも振ってるのか？」

「な、なぜそれを・・・？」

「いや、俺も昔やってたんだ。剣道」

「ケンドウ？」

「いや、こっちの話だ」

そっか、こっちにも刀が・・・

カンデ・ローナ（後書き）

どうも。今回は新キャラ登場ですね。

次回の予告は魔法、ワンスとは基本どのような物なのか？を説明していこうと思います。

いつも少ない文章の更新ですがよろしくお願いします。

武器

「おい中野。ちなみに言っておくがカンデは刀を振っているわけではないぞ」

いつの間にかメイサ先生がこっちに来ていた。

「え？」

思わず俺は聞き返してしまう。

「それはワンスに使う道具が刀に似ているからだ。

ようするに・・・魔法のつえみたいなの？」

「どつぐ？」

「ああ、そつだ。レット！」

「は、はい！」

セイカはいきなり呼ばれてピンツと背を伸ばす。

「お前のワンスを見せてやってくれ」

「わ、わかりました」

するとセイカは左手を前に出し集中しはじめた。その左手に光が集まりじよじよに形を見せていく。それは・・・

「ス、スナイパーライフル？」

こつちの世界のスナイパーライフルのような物だった。

「ス？ ま、まあレットの武器は『コールド・ウォーカー』。長距離射撃型の武器だ」

なるほど。で、この武器が無いとワンスは使えないとか？

「ほう。よくわかつたな。では、お前の武器を渡そう。G1へ来い」
メイサ先生は他の人に自習してると言い残し去っていく。俺もすぐG1へ向かった。ちなみにG1の入り口は生徒用と教師用に分かれ

ているので、別々に向かう。

（G1内）

「ほら」

ガチャリと音を立てながら渡されたのは・・・

「こ、これは？」

細く、長い刀。いわゆる太刀だった。

「うん？ お前の私物では無いのか？」

こんな私物化したら逮捕もんだよ。

「いや・・・。ちがいますが・・・」

「そうか。お前が倒れていた近くにあつたらしいが？」

そうなのか。でも一体誰がこんな物を？偶然とは考えにくいし・・・。

「まあお前にやろう。お前にも武器はなにかと必要だろう？」

「いや。必要無いかと・・・」

俺は別に魔法を学びに来たわけでも、武器を使いに来たわけでも無い。普通に元の世界に戻る法・・・

「それは無理だ」

「え？」

いきなりのメイサ先生の言葉。

「お前は異世界から来たらしいがどうやって来たのかもわからないのだ。それに・・・」

「それに？」

「今、このロカードは戦争の危機があるのだ」

「せ、戦争！？」

「ああ」

いや！ああ、じゃなくてさ！戦争ってあれだろ？殺し合いってやつ

だろ？

「り、理由は？」

「理由？」

そつだ。戦争には必ず理由があるはずだ。それがわかれば回避できるはず……

「今はわからん」

「な、なぜです!？」

理由が無い戦争なんて理不尽すぎる!

「諜報員から昨日、お前が発見されてから2、3時間後だ。急遽連絡が入った」

「……その相手は？」

正直、相手などはどうでもよかったが苦し紛れに聞く。しかし……
「これは機密事項だ。まだ戦争が始まったわけでも無いしな」

武器（後書き）

今回は少しわかり辛かったでしょうか？

次からはようやくこの世界の事情がようやくわかってきます。

では相変わらず読みにくく醜い文章ですが
よろしく願います。

オリジナル

メイサ先生は話を戻すぞと言ってから刀を見て言う。

「その刀は通称『ブレイカーソード』。レットのとは対照的に近距離斬撃型だ。能力は名の通りだと聞いている」

「え？ そんなこと言われても・・・」

わかるはずがない。なんだ？壊す？刀か？先生はふうと息をつく。

「まあ、実際に使えばわかるさ」

とだけ言っつてG1を出ようと立ち上がる。でもこれで俺もワンスが
使え・・・

「ああ、後、お前にワンスは使えないぞ？」

精神力が足りないからな、と言いついてしまった。むう、精神力か。とりあえずここから出よう。

外ではまだ授業中だけあってワンスの実習が行われていた。しかし抜き身の刀を持つてるのは嫌だな・・・。

「ん？中野君？それって・・・」

たまたま近くにいた女子（名前は忘れたが）俺のブレイカーソードを指して言う。

「ああ、なんか俺の武器だよ」

「ええ！すごいー！」

ん？なにがだ？皆持つてるんじゃないのか？色々の種類はあるらしいけど。

「それって自分専用ってことだよな？ね？」

「ま、まあそうなるな」

自分専用ってのは少し気分が良いな。

「専用武器つてG17からしか持てないんだよ？で、専用武器を持つてる人を『オリジナル』って言うの」

「ま、まじかよ！」

でも考えてみたらレットのコールドウオーカーしか見てない気が・・・？じゃあ

「みんなはなんでワンスが使えるんだ？」

「私たち、G17以下の人は身体の精神力を直接使ってるんだよ」
それだから精神の減りは激しいけどね、と付け加える。ん？待てよ・・・？

「でも確かワンスつて武器が無いと使えないんじゃない？」

メイサ先生がそんなこと言ってたような？

「ああ、本当のワンスはね。けど精神を直接使う私たちののは正確に言うところ『オールド』。初歩的なワンスつて感じ」

なるほど。でもわざわざ区別するのも面倒だからひとまとめにワンスか・・・。

「そんなとこだね。でも中野君つてホントになにも知らないんだね。やっぱり異世界から来たの？」

うっ！もうこんなとこまで広がってるのか。さすが99%女子クラス・・・。

「次！」

「あ、はい！ごめん。呼ばれたから行ってくるね」

タタタと走っていく女子（ごめん、まだわかんない）。見るとG17の人はあまり居ないのかほとんどの人が武器を使っていない。

「次！ 中野！」

「あ、はい！」

メイサ先生に呼ばれたのでそちらに急ぐと・・・。

「お前はワンスが使えないからな。オープンとアウターを行え」

「??？」

俺がわからないという顔をすると

「ああすまん。オープンは武器の具現化。アウターはその逆を意味する」

「は、はあ……」

全くわからない。

「そうだな……。おいカンデ！」

「は、はい！」

呼ばれたのはあのローナだった。

オリジナル（後書き）

さて今年最後の更新はあえて続きそうな雰囲気を残してみました。
これから主人公、修司はどうなっていくのか。で、いつまでたつてもこない戦闘シーンは？

などなど色々と問題が多い作品ですが

これからも、そして来年もよろしくお願いします！

LAC（ラック）

「中野にオープンとアウターを教えてやってくれ」

「な、なぜ私が・・・」

なんかローナとメイサ先生がもめてるな・・・。

「なぜって・・・。お前はG2だがオリジナルだろ？ 間接的ではあるがな」

「でも・・・」

「できないのか？」

「でっ！できませんよ！」

「よし、やれ」

ローナはいまさらメイサ先生に乘せられたことを知りうろと赤面した。

「お？話し合いは終わった・・・」

話しかけるが・・・。うわっ！すごい不機嫌そうだ。顔を真っ赤にして怒ってるのか？

「で、ではオープンとアウターについて教えよう」

「おう、よろしく」

意外と普通に説明が始まったな。

「基本的に専用武器、まあ私たちは勝手にLACラックと呼んでいるが、

LACは光の粒子が・・・

ん？またなんか新たな用語が出てきたな。しかもなんか理科の時間みたいな難しいことを言っているローナ。正直わからん。

「まあ、LACは自分の中にあると思ってもらえばいい」

じゃあ、最初の説明いらんだろ。

「メイサ先生。実習はどうしますか？」

「うん・・・。アウターだけでいい。オープンは明日だ」

「らしいからアウターだけを教える」
「そうか……。よし、がんばるぞ！」

教えてもらってからできたのは実に時間にして2時間。授業内にはもちろん終わらず放課後もずっとアウターの練習だった。なんだ？目の前のLACを体にしまっ感じって……。わかるわけねえだろ。まあ結局はできたんだがな。

「はあ……」

「おい。アウターぐらいでへばるな」

しかし自分の中に物が入っている感じはいい気持ちでは無いな。なんていうか異物が入ってる感じ。入ったことないがしらが。

「じゃあ、ローナもやってみるよ。でも確かお前G2だったな。なんでオリジナルなんだ？」

今まで気になってたことをさりげなく聞いてみた。しかし

「そ、そんなことはどうでもいいだろう！ では仕方ない。私のLACを見せてやろう」

豪快にスルー。まあセイカにでも聞いて見るか。なんて思ってたらローナはもうLACを出していた。

「コバルト・ナイツ。不本意ながらお前と同じく近距離斬撃型だ」
なぜ不本意なのかは知らんがローナのは短い刀を両手に1つつつ。双剣というものだろうか？

「へへ、いっしょなんだな。これって運命的な？」

俺が気軽にそう言うと……

「う、運命！？ い、いきなり何を言い出す！」

ん？ 冗談で言ったんだが。急に顔を真っ赤にしだした。怒ってくのか？

「え？ あの……」

冗談がバレたのかと思いきや謝ろうとしたが

「わ、私はもう部屋に戻る！　じゃあな！」

「お、おうまた明日」

俺がそういうとローナはピクッと一瞬止まり走り去った。なんだよあいつ。いやゝしかしアウトターだけでもできたから良かった。ローナに感謝だ。

LAC(ラック)(後書き)

新たな単語が出てきたり色々と難しいかと思いましたが
ご理解お願いします。

ではご質問、ご要望がありましたら
気軽に感想かメッセージでお願いします！

第3実習場

（ローナver）

（うう）。何なんだ！いきなり運命なんて言い出して！

ローナは先ほどのデリカシーの欠片も無い男。中野修司の言葉を気にしていた。

（ドキドキしたあゝ。しかし・・・少しは近づけたかな？）

そう。ローナの心は修司に傾いていた。しかし10代乙女の心をあまり理解できていないローナはハッキリと自分が修司に好意を抱いているということに気づいていない。とりあえず現状は『気になるやつ』だ。

（でも・・・。運命か。ふふふつ）

自室、170号室に着くがまだ浮かれているローナだった。

元に戻り修司ver

今はのんびりと自室で横になっていた。夕食までまだ少し時間があると云ってたし。セイカが。ちなみにエルナは王宮の使いで遠出しているらしい。エルナは陛下と親密な関係らしくよく学校を留守にするらしい。おつかれた。しかし日が経つに連れ気になるのが（つてか2日しか経ってねえけど）家のことだ。父、母共に海外の大手会社に勤めているのでめったに帰ってこないが、いきなり息子との連絡がつかなくなったら大なり小なり心配はするだろう。・・・たぶん。

「はあ。これからどうするかな・・・」

一人でブツブツ言っていると、コンコン、とノック音がひびいた。

「はい？」

「あの修司さんいます？」

いや、俺しかいねえだろ。自室なんだから。

「うん？ その声はセイカか？ あいてるぞ」

扉を開け入ってきたのはやはりセイカだった。

「あ、あら？ ルームメイトの方は？」

「るーむめいと？」

つて確か寮生活で同じ部屋になる人のことだ。

「ええ。・・・もしかして修司さんお1人？」

「うんたぶん」

この部屋にルームメイトが見える人は医者か霊媒師に見てもらった
ほうがいいと思う。

「それはいいですね！ 普通は同クラスの人がいるので1部屋2人
なのですが」

「いや。でもそれだと俺が女子といっしょになっちまうだろ？ さ
すがにそれはまずいだろうし」

ちなみに同室の女の子をどうしようとは思っていない。

「で、セイカ。俺になんか用か？」

自室に来てくれたんだから用は少しくらいあるのだろう。部屋に薦
めるが少しなので、と言い丁寧に断ってくるセイカ。

「明日の授業後、オープンができるようになりましたらごいっしょ
に第3実習場へ来てください」

第3実習場とは主に戦闘を想定した練習をする場所だ。

「わかった。でもなんでだ？」

理由も無く行く必要はもちろん無いのでセイカにたずねる。すると
・

「さ、さあ？ 私も先ほどメイサ先生に言われたので・・・」

セイカも知らないらしい。まっ明日のことだからいいか。

「わかった。じゃあ明日は何が何でもオープンをできるようにしな

いとな」

「そうですね」

会話しているといつの間にか夕食の時間（この世界も1日24時間だ）になっていた。そしてセイカと2人で食堂へ向かった。

食堂のことを改めて説明するとまず各クラスと一本道に繋がっておりG1とも繋がっている。しかし食堂自体がクラスごとに別けられている。1学年10クラスあるらしいからこの食堂は10等分された小さな（面積上は広いが）食堂になっている。クラスごとに壁で仕切られているため他のクラスは見えない。そしてここでCHRクラスホームルームをやる。が基本は各クラスですので放課後などに急な知らせが入るところでやるようだ。ちなみに全生徒の集会は大食堂と言われる場所です。

第3実習場（後書き）

こちらもご感想、ご指摘は何度でもよろしいので
少しでも気づいたことがあれば
ご遠慮なくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5465z/>

G20

2012年1月6日14時46分発行